０５・スマホの灯りしかない夜の地下書庫で、クラウディアに誘惑される

主人公が夜の学生寮に忍び込んだ一件から、約二か月後。十二月のある夜。
主人公とクラウディアは、例の、あまり使われていない白鹿女学院旧図書館地下書庫にいる。
二人は人の来ないここで、隠れてちょっとだけいちゃいちゃするのが常。
書庫の奥の奥、クラウディアのお気に入りスペースで話している。

主人公は、壁際に背中を向け、クラウディアを後ろから抱きしめながら話している。
クラウディアは時々振り向いて、二人はキスしながら会話する。
なので、ちっとも話が進まない。

今は、主人公が『０４・妄想劇場１：修学旅行の夜、嫉妬夜這いえっちされる』について報告させられており、それがちょうど終わったところ。
クラウディアが、これについてコメントするところからスタートする。

ＳＥ１　：図書館の環境音

【ストーリーパート03のSE1と同じ音】
【頭から最後まで流す】
【トラック終わりまで、ごく小さな音で流し続ける】
【0—5秒ほどまで流してSE2】

SE2　：二人が抱き合ってもぞもぞ動く音
【頭から流す】
【0—5秒ほどまで流してセリフ】

●中央　非常に近い
「【長めに唇を重ねるキスを二回する】
ちゅっ……ちゅ♥
【『まだ続きがあるんでしょう？』と思っている】
ふふ♥　そのあと私たちはどうなるんですか？
まだ続きがあるんですよね？」

〈主人公〉
「そう！　お部屋まで送って行こうとして、今度は定番の『なぜか鍵がかかっていない布団部屋』で、夜が明けるまでいちゃいちゃするの。
　それで、今度は人に見つかりそうになって、押し入れに隠れるというアクシデントも起こる。当然、狭すぎる押し入れの中でもえっちする」

●中央　非常に近い
「あは♥　定番ですね♥
【軽く一回だけキスする】
ちゅ♥」

〈主人公〉
「リアル修学旅行があの有様だったからね！　激しく未練がある！」

●中央　非常に近い
「私もです。実際の修学旅行は、日程すら違いましたもんね……」

クラウディア、主人公といちゃいちゃできて上機嫌。

校内なのでキスをして抱きしめあうだけだが、大満足である。
だが、話を聞いているうちに『修学旅行、一緒に行きたかったなぁ……』という思いがよぎる。
でも、そんな事言っても主人公が困るだけだ。絶対に言ってはいけない。
クラウディアは、言っても無意味な事を言うのは嫌いなのだ。
すでに起きた事は変えられないからである。

……でも、でも行きたかった。
人目を忍んで思い出セックスなんて贅沢、いや危険行為は望まない。
せめて、夜ちょっと抜けだしておしゃべりしたり、それが無理ならせめてクラスメートと一緒でもいいから、並んでご飯を食べたりしたかった。

でも現実は！　全部！　全部無理だった！　同じ空間にいる事すら叶わなかった！
先生が修学旅行に行っている頃、私はふてくされながら勉強していましたよ。
……はぁ、妄想の自分が恨めしい。先生といちゃいちゃしやがって。
自分な上に、妄想だから、本当は嫉妬する要素なんかないんだけど。嫉妬してしまう。
だって先生は、本物の私には相当気を遣ってくれている。

だから、いかにも見つかりそうな場所でセックスなんて絶対しないし、まして、欲望のまま乱暴に抱くなんてありえない。

……ああ、羨ましい。羨ましい羨ましい！　現実の私には絶対おかしな事しない先生だから好きなんだけど！

●中央　非常に近い

【あくまで穏やかに】

でも、ちょっと羨ましいです……♥」

〈主人公〉

「えっ？　どうして？」

●中央　非常に近い

「妄想の私は、先生とどこへでも行けるし、何にでもなれるじゃありませんか。本物より、優れていませんか？」

ところで主人公ったら、話に夢中で、だんだんキスしてくれなくなってきた。

そんなに妄想の私がいいの？　やっぱり自分の理想通りに動いてくれるから、本物より

かわいいのかな？
と、クラウディアがちょっとムスっとしていると、主人公は、しれっとこんな事を言う。

〈主人公〉
「でもね、妄想のディディもかわいいけど、わたしとしては、断然本物が最高だよ」

●中央　非常に近い
【穏やかに答えているが、正直、あんまり信じていない】
へぇ。妄想より本物ですか？　本当？」

クラウディアは常日頃、自分と他人を比べては傷つく、己の弱さを何とかしたいと思っている。
だが、その『他人』が、主人公の妄想の自分という『存在しないもの』になった事でよくわかった。
クラウディアは、自分自身を傷つけたいだけなのだ。
自分を卑下して『自分はこんなにダメな人間だ』という事にして、悪い事が起きた時の根拠にしたいだけなのだ。
そうすれば、嫌な事があっても、深く傷つく事はない。

『やっぱり自分はダメだった』と言って、納得する事ができる。
今も『妄想の自分の方が優れているのかも』と思おうとしていた。
でも、主人公は……。

〈主人公〉
「当たり前だよ！　本物のディディはあったかいし、いい匂いだし、ふわふわだし……。
何より、おしゃべりができる！
そもそも、こんな話まで聞いてくれるのこの世でディディだけだよ。
最初は恥ずかしいなぁ、こんな事させるなんてひどいなぁって思ったけど。
今はちょっと、心のすごく深いところまで話せてるみたいで嬉しいし……。
何より、始業式の日、ディディが全部許してくれたから。
わたし、今こんなに気持ちが楽なんだもん。
……ディディの事、ずっと好きになっちゃダメな人だと思ってた。
えっちな事だって、絶対考えちゃいけない。
もし考えたとしても、ディディに知られたら終わり。
嫌われて、二度とおしゃべりする事もかなわないって思ってた。
でも違った。わたしはこんなにダメな先生なのに、ディディは全部許してくれたよね。
もちろん、ダメなままでいていいなんて思ってないけど……。

ダメなわたしもディディが受け入れてくれたから、すごく前向きになれた。
ありがとう。大好きだよ♥　だからわたしは全然、本物派です♥」

クラウディアは思う。

……バカだなあ、この人。と。

こんな、本物の自分――つまり、いつもいい子ぶりながら、頭の中では悪態ばかりついている自分より、妄想の自分の方が、かわいくて都合がよくて、優れてるに決まってる。
なのに本物の方がいいとか、絶対にいかれてる。と。

でも、すごく嬉しい。
さっきの言葉も、途中までは『そう。結局先生は私の身体が目当てなんですね』とすねる事ができた。
でも『おしゃべりできるのが嬉しい』と言われてしまったらもうダメだ。
それは本物しかできない。妄想のクラウディアは、主人公が想定するクラウディアの人物像に沿った、主人公が指定した事しかしゃべれないからだ。

主人公は、完璧な都合のよさを持つ偽物より、欠点だらけで底意地の悪い本物を求めてくれるのだという。
クラウディアは思う。
『ああ、私はちょろい。今、飛び上がりそうなほど嬉しい……』と。

●中央　非常に近い
【すごく嬉しい】
ふうん……。
●右　ささやく　非常に近い
【甘えた声でささやく】
ねえ、先生。私……」

SE3　：部屋の灯りが消える音
【途中から流す】
【7―8秒ほどの、一回分の『カタン』のみ流す】

だが、ここで突如地下書庫の灯りが消える。
同時に、ブレーカーが落ちるような大きな音もする。

お約束だ……！
……じゃない。いったい何が起きたんだろう？

〈主人公〉
「あっ」

●中央　非常に近い
【素で驚く】
えっ。灯り消えちゃいました？　まだ閉館時間じゃありませんよね？」

〈主人公〉
「そのはず。えっ。なんでだろう？」

当然、主人公も何が起きているかわからないらしい。
クラウディアは今、正直めちゃくちゃいちゃいちゃしたいモードだった。
が、それどころではなくなってしまった。
まず主人公が見えない。くっついているから、いるのはわかるけれど。

ならここは『年下なのに冷静で頼れる私』をアピールしなくては。
転んでも絶対にただでは起きないのが自分である。
『えっこわーい♥』って抱きつくのは、残念ながら自分のキャラクターではない。
虫も暗がりも雷もダメな人間に育ってみたかった気もするけど……。

●中央
「【すぐ冷静になる】
少々お待ち下さいね。今スマホの灯りを付けます」

SE4　：クラウディアが、スマホのロックを解除する音
【頭から最後まで流す】
【小さめの音量で流す】

クラウディア、ポケットに入れていたスマホを取り出し、灯りを付ける。
思ったよりもかなり明るい。
持って移動すれば、歩くのも問題ないほど、周囲が照らされる。

〈主人公〉
「わースマホの灯りがありがたい。ディディは頼りになるなあ。
とりあえず、何が起きてるか確かめに行こう。
このままエレベーターまで行ってみようか」

●中央
「そうですね。ちょっと様子を見に行ってみましょう」

主人公、自然とクラウディアの手を引いて歩く。
クラウディアは、それがすごく嬉しい。

SE5　：主人公とクラウディアが、地下書庫内を歩く音
【ストーリーパート03のSE3と同じ音】
【頭から流す】
【0―5秒ほどまで流して、一度止めてセリフ。SE6は同じ音】
【少し足音が響くように加工をお願いします】

二人、そのまま書庫のエレベーターへ向かう。

しかし、そこはすでに電源が落ちており、稼働しなくなっている。
クラウディア、正直『これは……？』と、ちょっと期待してしまう。

●中央

「エレベーター、電気ついていませんね」

〈主人公〉
「階段はどうだろう？　行ってみよう」

SE6　：主人公とクラウディアが、地下書庫内を歩く音
【SE5と同じ音】
【途中から流す】
【6―12秒ほどまで流してセリフ】
【少し足音が響くように加工をお願いします】

二人、今度は階段を目指す。だが、こっちもシャッターが下りている。
クラウディア、さらに『これは……!?』と、期待してしまう。
だが、ちょっとは不安になる。自分は平気だが、主人公の事は心配だ。

●中央
「階段は……シャッター降りてます。
初めて見ました。こんな風になるんですね……」

〈主人公〉
「スマホは？　まさかの圏外？」

●中央
「あ。繋がります。
外に連絡できると思います」

クラウディア、安堵する。とりあえず、最悪の事態は避けられそうだ。

〈主人公〉
「はぁよかった！　これで安心だね。誰か先生を呼ぼう。
怖い思いさせてごめんね。これで帰れるよ」

クラウディア、主人公のホッとした顔を見て、ホッとする。
クラウディアは、部屋が暗い事なんて、ちっとも怖くなかった。
もし一人だったら、淡々と状況確認して、すでに連絡して、ヒョイと脱出を決めているところである。忍者だから。
だから、怖い事があるとすれば、部屋が暗くなった途端、主人公が別人になってしまうかもしれない事だった。
もし、暗がりで主人公が自分を放ってどこかに行ってしまったり、こうなってしまった事を責められたりしたらどうしようかと、クラウディアは不安だった。
でも、全然違った。『不安になった事自体が間違いだった』と申し訳なくなるくらい、主人公は優しくて、自分を最優先に考えてくれていた。

……ああ、ますますいちゃいちゃしたくなってきた。
正直まだ助けなんて呼びたくない。まだ一緒にいたい。

●中央　非常に近い
「ううん。先生と一緒だから怖くなんてなかったです。
でも」

〈主人公〉
「でも？」

●中央　非常に近い
「【正直、いちゃいちゃしたくてしょうがない】
人を呼ぶのは、もう少し、いちゃいちゃしてからでもいいと思います……」

〈主人公〉
「え？　でも、ここ、さっき暖房も切れちゃったみたいだよ。
これから寒くなると思う。ずっといたら身体冷えちゃうよ」

しかし、クラウディアはすっかりロマンチックな気分なのに、主人公はまったくそうではないらしい。

まぁ、それもそうか。先生だもんね。
でも、ちょっとくらいって思わないのかな、この人？
こんなイベント、きっともう二度と起きないでしょ。

主人公ときたら、さっきまで嬉々として自分の妄想を語っていたくせに、今じゃすっかり保護者モードに入っている。
クラウディアはそれが嬉しくもあるが気にくわなくもある。
そもそも、自分をこんな気分にさせたのは主人公じゃないか……！　と思ってしまう。

●中央　非常に近い
【だんだん甘えた口調になる】
ちょっとくらい寒くたっていいです。
部屋だってほら」

SE7　：クラウディアが、スマホを机の上に置く音
【頭から最後まで流す】

●中央　少し遠い
「**こうすれば明るいです**」

〈主人公〉
「ディディ……？」

●中央　少し遠い
「【すごく恥ずかしそうに】
だって、さっき。先生があんな話するから……」

クラウディアは爆発しそうだ。
最終的に無理でもいい。その時はあきらめる。でも、今は引き下がりたくない。
妄想の自分が誘惑できるなら、本物の自分だってできるはずだ。
いや、この理屈は完全におかしい。だが、それでもしたいのだ……！

SE8　：クラウディアが、自分のスカートをめくる音

●中央　少し遠い
「【すごく恥ずかしそうに】
私、したくなっちゃってるんですけど……。
『スマホの灯りしかない夜の地下書庫で、本物の私に誘惑される』
【少し間をあけてから。すごく恥ずかしい】
こういうのは、ダメですか……？」

このままフェードアウトして終了。